

令和2年度 前期・後期の終始業式（9月30日）

世界には記憶の地層がある

長野県蘇南高等学校長 小川幸司

1 世界には記憶の地層がある

大地にそれぞれの時代の土砂が堆積した地層があるように、この世界には、実はそれぞれの時代の人々が生きた痕跡、記憶が積み重なっています。その記憶は、ときにははっきり目に見えるものになっていて、それが芸術作品だったり、社会の制度や法律だったり、あるいは建造物だったりします。私は、それを「記憶の地層」と呼んでいます。

2 木曾川の一番広いところに架かる桃介橋

この蘇南高校のまわりの建築物を見てみましょう。

南木曾町を歩いていて、目にとびこんでくる桃介橋について、なぜこんなに目立つのかを考えたことがありますか。ふつう、橋は川幅の一番狭いところに架けます。その原理で皆さんが今、渡ってくる三留野大橋が架けられています。それに対して、桃介橋は、大正11年（1922年）に、木曾川が大きく曲がっている川幅の最も大きなところに架けられました。全長は、247.8mもあります。しかもこれは当時、道路がなかった天白地区の側にダム建設の物資を運んだり、切り出した木材を運んだりするための橋で、この上をトロッコが走っていました。だから今でもレールのあった場所の木の色を変えていますし、コンクリートの橋脚の部分にはレールが残っています。そして南木曾駅に接続できるようにしているから、国道19号よりもずっと高い。天空の橋になっているのです。

三留野大橋ができると桃介橋を使う人は少なくなります。昔の蘇南高校生は、ところどころ橋板が腐ってなくなっているのを避けながら、桃介橋を渡って登校したと言います。南木曾町は、一度、橋を廃止することを決めます。ところが壊すお金がないので、そのままにしていました。すると、これは素晴らしい建築物だから復元して町のシンボルにしようということになったのです。しかし保存するということは、莫大な費用がかかります。外観を大切にしながらも強度を高めないと未来に橋を残せません。その気の遠くなるプロジェクトに南木曾町は取り組みました。「破壊」ではなく、「未来につなぐ」ことを町は実践したのです。

最初にこの壮大な橋を建造したのは、福澤桃介。1万円札の肖像画、慶應義塾大学創設者の福澤諭吉の娘婿です。彼は、明治から大正にかけて日本列島の電源開発をして、日本経済をけん引しました。建設当時は「桃の橋」と名付けられましたが、復元保存後は「桃介橋」と呼ばれるようになりました。

彼は、木曾川を水力発電が立ち並ぶ電源開発の中心地にしようとしてしました。木曾川の発電を二百数十キロの送電線を作って大阪につないで、西日本の産業を動かそうとしたのです。福澤の会社、大同電力がこんにちの関西電力になっています。

3 ヨーロッパの古城のような発電所

蘇南高校から少し下流に行ったところに、読書発電所があります。何気ない建物のように見えますが、桃介橋と並んで重要文化財です。水車はスイス製、発電機はアメリカ製で、建物にはステンドグラスがはまるような半円型の窓があり、壁面にはアールデコ調の実に美しい装飾が施されている。上流から山の中にトンネルの水路を掘って、山の上から発電所に水を落として発電をするのですが、途中の柿其地区では水路が地上に表れるので、ローマ風の水道橋でこれをつなぎました。柿其水道橋も重要文化財に指定されています。これだけの美は、本来は発電とは関係ありません。福澤が、ドイツのライン川に美しい城が立ち並んでいるように、木曾川を城のような発電所で飾ろう

としたのです。木曾谷は、陸の道路を歩けば江戸時代の宿場の面影に出会い、木曾川を下れば大正時代のヨーロッパ風の近代建築に出会うことができるのです。

当時、日本最大の発電量を誇った読書発電所から北上すれば、大桑村の大桑発電所、須原発電所、そして上松町の桃山発電所が、そして南には賤母発電所、落合発電所が続きます。どれも素晴らしい建築美が目指されました。ちなみに発電による電気の周波数は、西日本と東日本では違うために、木曾川でつくられた電気は西日本の周波数です。しかし桃山発電所には周波数変換器が設置されており、東日本で電力が足りないときに周波数を変えて送電できるようになっています。

さらに言えば、福澤は、発電所の礎石に世界の有名人からメッセージをもらって刻みました。落合発電所には、なんと世界の発明王エジソンが、「発展してやまざる日本の事業と技術に対し、最高の尊敬と賞賛を捧ぐ」というメッセージを寄せています。大桑発電所は、フランス首相クレマンソーが、桃山発電所には無線電話の発明者のマルコーニが、須原発電所にはイギリス首相のロイド・ジョージが…というように、世界史の教科書に登場する有名人のメッセージが、それぞれの発電所の完成を祝い、建物に刻まれているのです。（残念ながらそのレリーフはほとんど現存していません。）

4 「新しい女性」としての貞奴

福澤桃介は、福澤諭吉の娘と結婚していましたが、妻は人前にあまり出たがらない人であったと言います。やがて福澤は、女優の川上貞奴を自分のパートナーとして仕事を一緒に進めるようになります。貞奴は、小さい頃、事業を行っていた実家が破産して、芸者の家に養女に出されました。明治憲法を起草した伊藤博文の寵愛を受けますが、やがて俳優・演出家の川上音二郎と結婚し、世界巡業に出かけます。貞奴の日本舞踊や女優としての演技が、アメリカやヨーロッパの人々に大人気を博しました。パリでは、「考える人」を作ったロダンが、是非、彫刻のモデルになってほしいと貞奴に頼みます。貞奴というネーミングは、欧米の人々からエキゾチックな響きを期待されたものでした。

川上の死後、貞奴は、若い頃に出会ってひそかに思いを寄せていた福澤と再会し、パートナーの関係になり、二人が木曾川の電源開発のための別荘として建てたのが、蘇南高校の足元にある桃介記念館の建物でした。大正時代の木曾谷に、パリの社交場のような空間が出現したのです。（いまだ中に入っていないという人は、是非、蘇南高校にいるうちに見学をすることを勧めます。見事な室内装飾の建物です。）この建物は、福澤や貞奴の死後、蘇南高校の教員のための独身寮となります。失火によって2階部分を焼失するも、復元されて、こんにち記念館として保存されています。

福澤が「愛人」と住んだ別荘にすぎないと言う人もいます。確かに貞奴は、妻子ある福澤と正式な婚姻関係にはなかったわけですが、福澤の仕事の同志であり、相談相手でした。何よりヨーロッパで男と対等に生きる女性の姿を目の当たりにし、男に守られる女ではなく、やりたいと思う仕事を臆することなく行い、自分の望む人生を自分で作る女性として生きたのが、貞奴でした。この山荘から彼女は真っ赤なオートバイを乗り回して、発電所の工事現場に向かって指示を出していたと言います。

だから蘇南高校の足元の福澤山荘は、「新しい女性」が生まれた場所だったと言えるのではないのでしょうか。

5 時代に流されずに「破壊すること」を疑う

さて、1929年に世界恐慌が起これると、日本やドイツ、イタリアは、武力で植民地を拡大し、経済的危機を克服しようとする動きが出てきます。

福澤は、1929年に書いた論文（「電話・鉄道・水力電気等、木曾工業の半官半民会社組織の議」藤本尚子『天馬行空大同に立つ～福澤桃介論策集解題』所収、世界書院、2017年）のなかでこう論

陣をはりました。「古来、英雄のなした事業のうち、最も大なるものは領土の拡張である。シーザー・ナポレオン・ジンギスカン・太閤秀吉みなそうである。しかし現在は昔のように武力をもって領土を拡張することは絶対に不可能である。」と。

ゆえに福澤は、軍部が日本の政治を動かしていくことを、とても警戒していました。信濃毎日新聞の社説を担当していた桐生悠々というジャーナリストが、軍備拡大を批判する記事を書いて政府からにらまれ、信毎を追放されてしまいます。その桐生が名古屋におちのびて、細々と自分の雑誌を出し続けた時、その財政支援をしたのが、福澤でした。

つまり、蘇南高校のまわりの桃介橋、発電所、そして山荘を築き上げた、稀代の事業家と元女優は、日本の経済が発展していくためには、戦争という手段に頼ってはいけないのだということを考えていたのです。破壊するのではなく、未来につなぐという桃介橋の原点は、福澤の考え方そのものだったように思われます。

おわりに

日本の経済を支える電力と日本を代表する建築物をつくり、自立する女性という日本の新しい生き方をうみだし、武力による発展ではなく民間の経済による日本の発展を望んだ二人——福澤桃介と川上貞奴の記憶が地層のように重なる蘇南高校に、皆さんは学んでいるのです。

この地層の上に立って、皆さんは自分の人生をどのように組み立てますか。